（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	佃　麻美
論文題目	中央アンデス高地でアルパカとともに生きる人びと： 牧民村落の市場経済化と技術の変容		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、ペルーの中央アンデス高地においてアルパカを主に飼養する牧畜民を研究対象とし、アンデス牧畜の技術的特異性ならびに人びとの社会経済生活を詳細に描いた民族誌である。申請者は、2009年から2017年までの間、延べ28か月におよぶフィールドワークによって一次資料を収集した。本論文の目的は、１）アンデス高地牧畜民による家畜の管理方法、２）グローバルな経済に包摂された牧畜民社会の動態を明らかにすることである。本論文は、序論を含む全９章から構成されている。

「第１章 序論」では、アンデス地域を含む世界各地の牧畜民の生業様式およびラテンアメリカの村落における市場経済化に関する先行研究を検討し、本論文の視座を示した。従来、牧畜という生業様式は、人類史や生態人類学的な観点から、家畜化や生殖管理技術、搾乳と乳利用、牧地の季節移動を中心に論じられてきた。世界各地の牧畜技術と比較すると、アンデスでは他地域とは異なり、アルパカを含むラクダ科家畜の搾乳は行われていないという、顕著な特異性をもつことを提示した。

「第２章 調査地概要」では、まず中央アンデス高地の自然環境、南米に棲息するラクダ科動物の特徴について記述した。つぎに主要調査地における社会経済状況を概観した。そこでは、住民の過半がアルパカの飼養に携わって現金収入を得ていること、一方、かつてキャラバンの駄獣として利用されていたリャマは、道路の開設と自動車の導入に伴い、急速に数を減じていることを明らかにした。

「第３章 家畜を飼う生活」では、調査地における牧畜の周年活動とそれに携わる家族構成について分析した。また近年、土地を保有しない「雇われ牧夫」が、牧畜活動の維持に不可欠な役割を担うことを明らかにした。さらに、アンデス牧畜の特徴とされてきた定住性について具体的事例から検討し、従来の定住モデルが不十分であることを論証した。

「第４章 日帰り放牧と母子関係への介入」では、アルパカの日帰り放牧や、牧夫による家畜母子への接触について具体例を提示し、アンデス地域の牧畜様式と、東アフリカや中央アジア、アルプス地域の牧畜様式とを比較検討した。その結果、アンデス牧畜の特異性を確認すると同時に、他地域の牧畜と共通した家畜管理技法が存在することを明証した。

「第５章 「遺伝的」改良の取り組み」では、外貨獲得の主力輸出商品であるアルパカ毛の品質改善のために、ペルー政府による政策として、科学的手法が牧畜民に伝達される実態を示した。牧畜民は、新たな遺伝的改良技術を受容すると同時に、科学的知識とは相

いれない民俗知を保持していることを明らかにした。

「第６章 家畜品評会と繁殖用家畜の取引」では、アルパカ品評会および生体売買の経済的意義と品質改良に果たす役割について検討した。品評会は、アンデス各地から集まってきたアルパカ毛の品質改良に意欲をもつ牧畜民が、入賞したアルパカを繁殖用に購入する機会を提供している。繁殖用アルパカ生体の売却は、毛や肉の売却よりも大きな利益を牧畜民にもたらすことを明らかにし、高評価を獲得したアルパカ生体は高額商品として流通しており、アンデス広域の品質改良に効果をあげている可能性を示した。

「第７章 毛刈りとアルパカ毛をめぐる取引」では、牧畜民と仲買人との経済関係について検討した。零細な牧畜民にとって、アルパカ毛の売却は主要な収入源である。しかし牧畜民は、アルパカ毛売却価格の不安定性、重量計測や金銭の支払いをめぐり、仲買人に不信感を抱いている。他方、牧畜民は、金銭の貸借等を通じて仲買人に依存せざるを得ない。こうした具体的事例から、市場経済における零細な牧畜民の脆弱性を明示した。

「第８章 資本主義と牧民村落の社会関係」では、牧畜民間の経済格差に対する彼ら自身の解釈について検討した。零細な牧畜民の妬みや嫉みをともなう語りには、インカ時代の財宝の隠匿やスペインによる略奪に関する神話的伝承が包含されている。牧畜民自身には制御不能な富の産生と不均衡な配分という理不尽な困窮状況に対して、人びとは民俗知を援用しながら理解を試みていることが示された。

「第９章 グローバル化のなかで生きるアンデス牧畜民」では、これまでの議論を振り返ったうえで、総合的な考察を行った。まず、丹念な参与観察に基づき、牧畜という生業を成立させるうえで不可欠の家畜管理技術が、アンデスにも他地域と類比可能な技術形式として存在することを確認した。そして、市場経済化がもたらす牧畜様式の変容が、世界各地で観察されることを指摘した。このように、本論文で明示されたアンデス牧畜に関する知見が、現代の牧畜研究に新たな視角を与える可能性を示して、本稿は閉じられる。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、人類史を包括的に考察するうえで重要な生業様式のひとつである牧畜に焦点をあてた文化人類学的研究である。研究対象は、中央アンデス高地において生活を営む、主にアルパカを飼養する牧畜民である。申請者は、標高5000メートルに迫る低酸素の過酷な生態環境のもと、牧畜民の家族とともに過ごしながら、延べ28か月に及ぶフィールドワークを遂行し、貴重な民族誌資料を丹念に収集した。

第１章では、先行研究の検討に基づき、本論文の主要な論点を２つ提示している。

第一に、アンデス高地におけるラクダ科のリャマとアルパカ飼養は、母子分離とそれに伴う搾乳の欠落という、他地域の牧畜にはない特異性を有しており、かつて牧畜という生業様式の範疇から除外されていた点である。

第二に、アルパカ毛は高級衣料素材として世界市場において高額で売買される商品であり、ペルー政府はアルパカ毛の輸出を推進し、家畜の品種改良を後押ししている。一方、その主要な生産者であるアンデス牧畜民は、経済格差が生じながらも概ね国内の「最貧困層」に区分されている点である。

第一の論点は、壮大な人類史の古典的研究に遡及することが可能な主題であり、対照的に第二の論点は、グローバル化した現代世界の周縁に生きる零細な牧畜民の脆弱な経済的位置に焦点をあてている。このように本論文は、幅広い牧畜研究の新旧両端を結ぶ意欲的な研究として、その独創性を評価することができる。

調査地の生態環境や南米ラクダ科動物の特徴を概説する第２章に続き、第３章と第４章では、第一の論点に関する議論が主に展開される。

第３章では、牧畜民の放牧実践に関する一次資料を示したうえで、牧畜民の間で経済格差が生じていることを論証した。さらに、アンデス牧畜は通常「定牧」とされてきた定説を検証した。申請者は、GPSデータの慎重な分析により、牧夫と家畜群が水や草地を求めて、標高差70メートル以内の短距離移動を行うことを明らかにし、従来の「定牧モデル」を修正する新たな資料を提示した。

第４章では、家畜化に関わる母子関係への牧夫の介入について、放牧実践に対する微細な観察に基づいて検討した。母子分離と搾乳の欠落した南米の家畜飼養は、かつての生業論において、牧畜の範疇から除外されてきた。しかし申請者は、幼獣のための搾乳等、家畜化の要諦である介助技法が、アンデスにおいても明らかに存在することを実証した。これは、今後の研究においてアンデスと他地域の牧畜との比較検討を促す発見であり、その新規性を高く評価することができる。

第５章から第８章まで、グローバル化したアルパカ毛市場の末端にあるアンデス牧畜民の社会経済状況について、第二の論点に関わる詳細な記述を展開している。

第５章では、輸出用アルパカ毛の品質向上を目的とした、政府の遺伝的改良プログ

ラムを受容した牧畜民による家畜の生殖管理について詳述した。続く第６章では、家畜の選別繁殖に重要な役割を果たす、品評会および生体の売買について論じた。品評会で入賞したアルパカを飼養する牧畜民は、名誉とともに大きな経済的利益を得る。２つの章において、従来の牧畜研究では等閑視されがちだった家畜の商品化に着眼しており、本論文の独自性を見出すことができる。

第７章では、繁殖用生体の売買に関与できない、零細牧畜民によるアルパカ毛の売却に焦点を当てた。牧畜民は、仲買人がアルパカ毛の買取価格を不正に低く設定しているという不信感を抱いている。そこでフェアトレード運動に関連する組織が設立されたが、支払いの遅滞等が生じ、仲買人依存から脱却困難な状況が継続している。本章では、牧畜民をグローバル経済の周縁的生産者として捉える、重要な視点を提示している。

第８章では、牧畜民の間で経済格差が拡大するなか、妬みが生じる事例を提示し、「持つ者」の富がインカ時代に隠匿された金に由来するという神話的伝承を分析した。牧畜民の社会経済は大きく変容したが、人びとの思考枠組みは強い持続性を示しており、経済的に困窮する現状に対する認識を基礎づけていることを論証した。

このように本論文は２つの論点を通じて、アンデス牧畜民によるアルパカの放牧と管理技術から遺伝的改良、生体の商品化、さらに経済格差の語りまで、豊富な民族誌資料を提示して丁寧に分析している。人類史に関わる牧畜研究に資する新たな事例の提示に加え、グローバル化した市場経済の周縁におかれた牧畜民の生活実態を活写しており、アンデス地域研究はもとより、文化人類学的な牧畜研究への貢献は大きい。

一方、アンデス以外の地域における、ラクダ科牧畜に関する生態人類学的研究への言及が寡少である。また、ペルー国内の政治経済的な背景説明や、グローバル経済に関する理論的検討も不足している。しかし、これらの諸点は、本論文の価値を決して貶めるものではなく、今後の研究展開における将来的な検討課題と考えられる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和５年７月３日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降